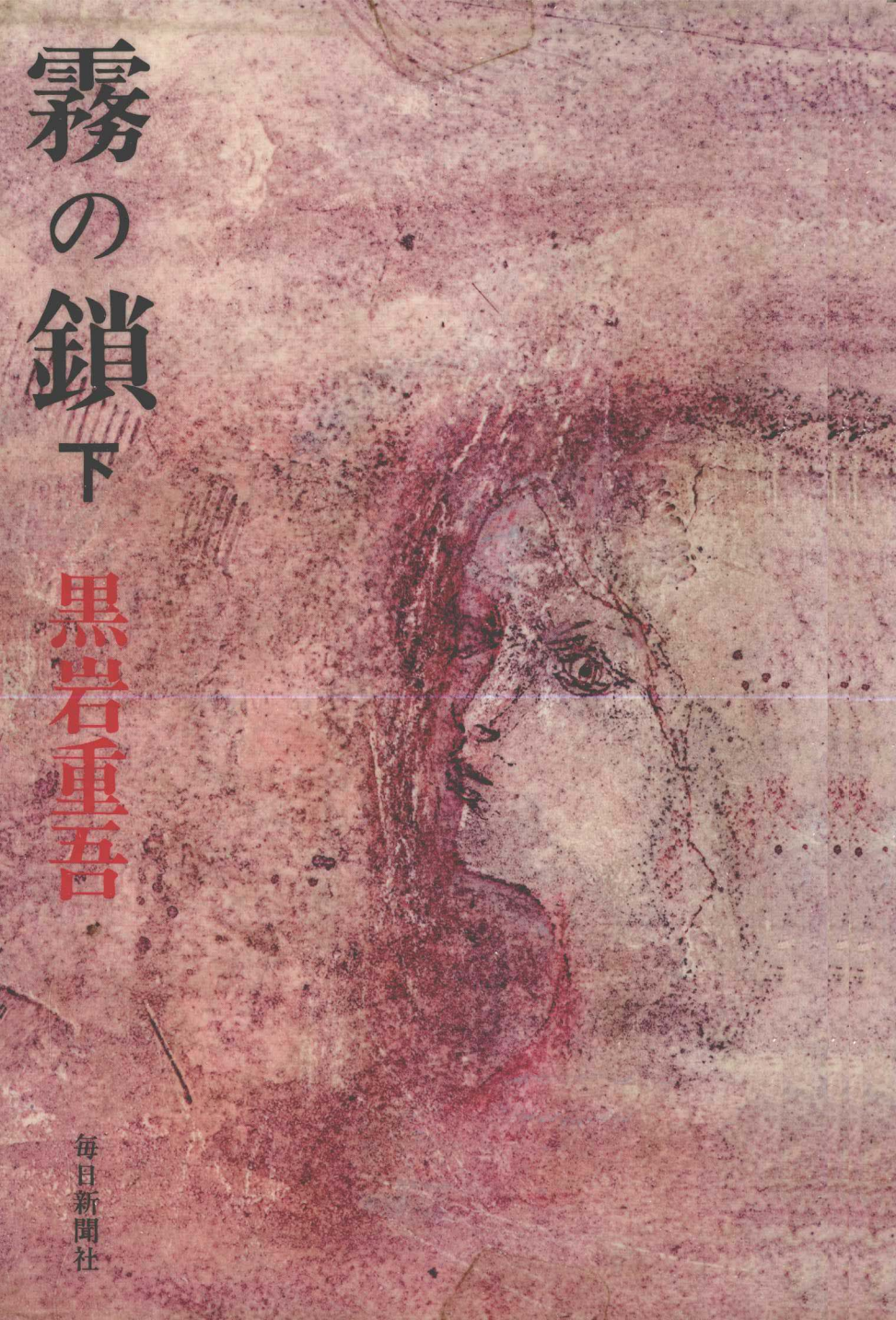


霧の鎖下

黒岩重吾

毎日新聞社



の鎖 下

黒岩重吾



霧の鎖・下

定価二一〇〇円

昭和五十六年十月三十日 第一刷
昭和五十六年十二月五日 第五刷

著者 黒岩重吾

編集人 川合多喜夫

発行人 関根望

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北
九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

検印省略

霧の鎖

下

装帧
松田
穰

忘 年 会

十二月の下旬になると木枯しが吹き始めた。六甲山の風は激しい。時には六甲連山が泣き叫ぶような音を立てることもあった。だが、このところ康雄は社の仕事も幸子との関係も順調で、木枯しなど気にならなかった。悲鳴にも似た木枯しに、人生の佗しさを感じるのは、孤独感を抱いている人達である。

長年生活を共にして来た優子が、孤独感に悩まされているのに、康雄は気付いていなかった。何故なら康雄が帰るのは大抵深夜であり、かなり酔っている。だから家に戻ると優子と話すのが煩わしく、蒲団にもぐり込むと熟睡する。土曜日はゴルフだし、日曜日は幸子と会う。康雄が優子の孤独感に気付かないのも無理はないかもしれない。だが、それは康雄のエゴであった。康雄は家庭外のことで人生の充実感を味わっていた。いや充実感に酔っていた。酔っているから妻に対する思い遣りが欠如している。妻の気持を無視していた。二十年近い夫婦生活である。妻は時には、夫と話し合いたい。人に話せないことを話すことが出来るのは夫だけである。

そういうところに長い夫婦生活の存在価値がある。ところ

が、優子の場合、夜の夫婦生活だけでなく、会話さえも拒否されている。

優子が欲求不満と孤独感にさいなまれているのも当然である。そんな宇田夫婦が、余り問題を起こさず過しているのは、優子の忍耐力にあった。だがそれにも限度がある筈だった。康雄と優子の間の亀裂は徐々に拡がっているが、見えただけに、康雄は亀裂の深さに気付いていなかった。

そんな或日、康雄は原口と祝杯をあげた。原口のすすめで買ったK金属は、原口の勘が当り、百三十円から百四十円で騰ったのだ。康雄は飯坂の許可を得て、五百万株買っていた。百三十円から買い出したから平均の買い値は百三十四円だった。そして康雄はK金属が百四十円を越えたところで五百万株を全部売った。売り値は手取りで百四十一円だった。一株について約七円の儲けである。五百万株だから利益の総額は三千五百万円だった。

康雄は飯坂から、なかなかやるじゃないか、だが余り無理をするな、といわれた。

飯坂は感情を顔に出さない男である。だからK金属に関する康雄の功績を手放しで褒めたりしない。余り無理をするな、と釘を刺している。だが珍しく飯坂の眼は微笑を浮かべていた。康雄の功績は飯坂の功績にもなるからだ。今年一年間、康雄は社の資金を運用し、約二割近い利益を生み出していた。損をした分を差し引いてそれだけの利益をあげたのである。飯坂が康雄の功績を認めたのも無理はない。

ただ問題は来年だった。世界情勢は混沌としており、証券界もどうなるかわからない。

だからといって失敗は許されないのだ。

だがそれは来年のことである。原口と知り合ってから、康雄は運が付き出したような気がしてならない。原口も今年は良い一年だったと喜んでゐる。

その夜は康雄と原口との忘年会のようなものだった。

康雄と原口は梅田の割烹店で食事をし、キタ新地に飲みに出た。原口の馴染の店は、康雄にとっても馴染の店になっていた。

二人は上機嫌で、飲み歩いた。十一時前になって、最後どの店に行こうか、ということになった。康雄はキタ新地で飲んだ後、幸子の店に行く積りでいた。そのことは原口も充分承知している。

「女の子を二、三人連れて千里に行きましようや、忘年会だから、歌でも歌って騒ぎましよう……」

原口は康雄の気持を充分見抜いていた。

「そうだな、まあ君の気に入っている店に行こうや、そこで二、三人揃えたら良いじゃないか……」

幸子が開店した深夜クラブには、アルバイトの若い女性が一人居るだけだ。原口は騒ぐのが好きだから、康雄と二人で幸子の店に行っても面白くない筈である。だから康雄は原口のために、そうだったのである。

「じゃ、香本に行きましようか……」

と原口は照れたように顎を撫でた。最近、原口は一人で香本に飲みに行くことがあった。どうやら好きな女でも出来たのかもしれない。香本というのは指名制の大きな店で、キタ新地では美人が揃っているの有名な店だった。ただ康雄は、気になる女が香本に一人居た。康雄に会釈した女である。康雄が原口と一緒に香本に行っても彼女は、康雄達の席に出来ない。ホステスが大勢居るし、指名制なので、こちらから呼ばなければ来ないが、何処かで会った女である。何処で会ったか記憶にないが、時たま会う度に会釈するから向うは康雄を知っているのだ。

ところが康雄は何処で会ったか覚えがない。康雄は次長になってから、キタ新地に飲みに行くようになったが、ホステスと浮気をしたことはただの一度もなかった。あれだけ飲んでいるのだから、一人や二人あったとしても不自然ではない。だが康雄は証券会社の法人部の連中に招待され、飲みに行くようになった時、ホステスとはどんなことがあっても関係を持たない、と決意していた。その点に關し、飯坂に最初、忠告されたことも原因の一つである。

「飲むのも良いが、女性関係は気をつけろ、変な女に当れば身の破滅だ、また、そろそろ、色々な連中が、君に眼をつける、女を使って旨い汁を吸おうとする者も現われないうちも限らない、女だけは、気をつけろ」

飯坂にいわれ、康雄は、浮気をしない、と決意したのだった。そのうち貝塚幸子と再会し、関係を持てしまった。そ

れ以来、康雄は貝塚幸子に夢中になった。もし幸子がホステスだったなら、康雄は幸子と関係を持たなかったかもしれない。

だから康雄は、飲んでいて冗談をいったりするが、クラブの女に親しい者は居なかった。しかし、会釈されると気になる。しかも彼女は康雄の席に来ないのだ。

「香本が嫌なら、別の店でも良いですよ」

と原口がいった。

原口は職業上、動物的な嗅覚を備えている。康雄は首を振った。

「別に嫌なわけではない、ただ一寸気になる女が居るんだよ」

「ほう、どういう女ですか、知らなかったなあ、何という女ですか？」

「席に来たことがないから、名前も知らない」

康雄は原口に、会う度に親し気に会釈される、と告げた。

「へえ、そのくせ席に来ないんですか、興味があるなあ、香本の女の子は指名制だから、客を取るのに必死ですよ、会う度に会釈するのは、宇田さんを知っているからでしょう、しかし、席に来ない、というのはおかしい、何故遠慮しているのかなあ、そんなつましい女性が香本に居るなんて考えられないですよ、今から行って呼んでみましょうや」

原口は興味津々の面持ちでいった。

呼んで何処で知り合ったか、ぐらい訊いてもおかしくない

だろう、と康雄は思った。それに、原口がいったように、これまで一度も席に来ない、というの、なかなか控え目な性格である。確かに、客を取り合っている香本のホステスとしては、珍しい女だった。

原口はかなり酔っていた。歩きながら歌謡曲を歌っている。原口の好きな歌は、王将、だとか、無法松の一生、など古い歌だった。

身体が大きく、胸が厚い原口は声量があった。王将を歌った後など、原口は思い出したように、女房には苦勞をかけていますわ、と額を叩いたりする。

原口は、家庭内ではワンマンだった。深夜自宅に戻って、お茶漬を食べる時など、眠っている細君を叩き起こすらしい。

「睡眠不足のせいかな、女房の奴、中年太りだけはまぬがれてますわ、その点、僕に感謝して貰わなくちゃ」

原口が細君のことを口にするのは、余程酔った時しかない。ただ康雄は、原口が細君について喋っても、余り優子を思い出さなかった。というのは、康雄は原口のようにワンマンでないし、外泊など、めったにしたことがないからである。康雄は日曜日に幸子のマンションを訪れても、彼女の部屋に泊ったりしない。必ず、午前二時頃までには自宅に戻るようにしている。幸子も、泊って欲しい、と康雄に要求しないが、康雄の心底には、まだ家庭だけは守らなければならない、という意識があった。だから康雄は、原口の細君に較べ

たなら、優子は幸せだ、と身勝手な考えを抱いていたのだ。

クラブ香本は六十坪ばかりの派手な店だった。奥にフロアがあり、バンドが演奏している。ホステスも、四十人以上は居る。店内の調度も贅沢で、ソファなどもゆったり取っていた。指名制の店なので飲み代は高く、ボトルをキープしていても、一人最低二万円は掛る。自費で行けるような店ではなかった。

原口には、かなり交際費が出るようだが、この店の払い、自費で出しているようだった。ただ原口は相場でかなり儲けており、少なくとも、一夜の飲み代の半分は自費で払っているようだった。大証券会社の法人部の次長ともなると、株に対する情報が早く入り、儲ける率が多い。それに原口は証券マンとして有能で、かつて遊戯場の店主、ラブホテルの経営者、不動産屋などを集め、仕手相場をつくり、大金を握ったことがあるらしい。どれぐらい儲けたのか知らないが、多分康雄が想像している以上の大金に違いなかった。

二人が香本に入ったのは、午後十一時前だったが、店内は混雑していた。こういう高価な店に、一流会社の幹部連中は来ない。だから客筋は、金持だが質は落ちる。

原口が仕手相場を張った時参加したような客が多い。なかには明らかに暴力団の幹部らしい客も居た。女達は身を飾ることに懸命で、ホステスの中には、大きなダイヤやエメラル

ドの指輪をしている者も居た。原口はこういう店でも、惜し気もなく金を遣う。原口達の席に集まった女達の中に比較的大柄で丸顔の女が居た。貴美という源氏名の女で、年齢は二十七、八である。

貴美は歌が上手く、時々店のマイクで歌っている。康雄が観察したところによると、原口は比較的グラマーな女性が好きなようであった。それに性格は気風の良い女でなければならぬ。かまととの的な女だとか、大人しい女は原口の好みではない。

康雄はそれとなく例の女を探したが、見当らなかった。一時半を過ぎると、女性も客もかなり減った。

どうやら今夜は、彼女は休んでいるようである。視線が合うと、遠くからでも会釈を送って来るので、もし店に出て居たなら、分らない筈がなかった。康雄は、今夜は休んでいるようだ、と原口にいった。

「それは残念ですな、僕も興味があったのに……」

原口は本当に残念そうだった。

貴美が原口に誰のこと？ と訊いた。

原口は康雄の顔を見た。貴美に訊いても良いかどうか、と尋ねているようだった。

そういう点原口は酔っていても、繊細な神経の持主なのである。酔いに乗って客の気持を無視するような言葉は吐かない。

康雄はブランドイを口に運びながら、首を横に振った。原

口は分った、といった風に頷き、貴美に、お前には関係がない、と告げた。ところが貴美を始め、席に來ている女達は諦めない。彼女達にとって、客に噂される女は、仕事上のライバルなのである。

冗談のように、宇田さんの好きな人ね、といっているが、眼は光っている。

「好い加減にしろ、帰るぞ」と原口が大声で怒鳴った。

原口にとっては女達よりも、康雄の方が大切なのである。原口の怒鳴り声が真剣だったので、女達は一瞬黙り込んだ。

貴美が原口の太腿に手を置き、

「御免ね、悪かったわ、怒らないで」と謝った。

康雄は原口と貴美とが特別な関係にあるのを感じた。他の女達は白けた顔で黙り込んでいる。

「分ったか、俺が駄目だ、といったことは駄目なんだ」

原口はまだ怒っていた。

康雄としては、自分が原因なので、原口をなだめざるを得ない。

「原口君、そう怒るなよ、誰だって興味を持つ、貴美、もう良いんだ、彼は本気に怒っていない、さあ、飲もう」

貴美はほっとしたように、康雄に、すみませんでした、と謝った。どうやら貴美は原口に対して、かなり好意を抱いているようだった。それから飲みなおし、気がついてみると午

前零時近くになっている。

康雄と原口の席には、貴美以外二人の女性が残っていた。客はもう一組である。

派手な背広を着、眼鏡を掛けた五十年輩の太った男である。彼の傍には一人しか女性がついていない。だがその男は和服を着た色白のその女に気があるのか、こちらに視線を向けない。康雄はその男の顔に見覚えがあった。一度社内ですったような気がする。

「さあ、今から豊中の方に飲みに行く、帰りが豊中方面なら、送って行くぞ」

原口がいうと、残っていた三人が、送って、と手を挙げた。

康雄と原口はマネージャーの挨拶を受けながら階段を上り、路上に出た。

「宇田さん、さっき居た男、知っていますか？」

原口が囁くように康雄に訊いた。

「いや知らない、ただ、一度だけだが、会社で見たことがある、総務部長と一緒にだったので覚えてるよ、一体誰だい？」

「総会屋の橋田です、まあ大物クラスでしょう、三年ほど前、恐喝で検挙されましたが、無罪になりました、会社側が工作したんですな、全くああいう連中は経済界の壁蝨ですな、総会屋の中にも、すかつとした男らしい奴は居るんです、殆どは橋田のような奴ばかりですよ」

「そうか、総会屋か……」

康雄は吐き出すようにいった。

M化学は、総会屋達とは余り付合ひのない会社であった。

それでも、総会の季節になると、かなりの総会屋が金を貰いにやって来る。総ての総会屋をM化学のような会社でも、締め出すことは不可能だった。ただM化学には昔から大物総会屋の増岡行山がついており、会社自体が地味だったので、総会でトラブルを起こしたことはなかった。

女達を着換えてやって来た。驚いたことに三人共ミンクのコートを着ていた。

貝塚幸子はまだミンクのコートを持っていない。ホステスがミンクのコートを無造作に着ているのは、パトロンか、またそれに近い客から買って貰っているからだろう。

給料でミンクのコートなど買える筈はない。康雄が、素晴らしいコートだな、というと、女達は口を揃えて、月賦で安く買っている、といった。

「嘘をつけ」

と原口が笑った。

「原口さん本当よ、だって、お客さんの中に毛皮屋さんが居るの、だから、安く買えるのよ、市価の半値ぐらいよ」と貴美が説明した。

「本当よ、ミンクのコートを市価で買う女の子なんて居ないわ」

康雄と腕を組んでいた女が口をとがらした。

女達の説明を聞いていると、如何にも真実らしく聞えるから妙であった。

原口と康雄は、貴美を始め、女達を車に乗せ、幸子の店に向ったのである。

店の名前は、バレ・ユキだった。

再会

康雄と原口は、クラブ香本のホステス貴美を始め、他の二人のホステスを乗せて、千里ニュータウンの方に向った。かつての万博で出来た新御堂筋に入ると、車の流れは良くなる。千里ニュータウンの少し先に、幸子が開店したバレ・ユキがある。貴美は原口と、もう三度も幸子の店に行っているようだった。ホステスの一人が、明日が早いので、今夜は遊びに行けないから、自宅に戻りたいので、先に送って欲しい、と頼んだ。原口は彼女をマンションまで送ったことがあるらしい。バレ・ユキより少し先だが、今の時刻だと彼女を送っても、そんなに時間は掛らない、と原口は康雄にいった。

「ああ、先に送ってやるよ」

と康雄は彼女に告げた。

康雄にとっては全く興味の無い女だった。

もう一人は貴美の友達で、バレ・ユキに遊びに行くことを愉しみにしていた。ピアノもあるし、マイクが良いので、歌い易い、という。幸子は、ピアノを置くのは諦める、と康雄にいつていたが、開店の日に行ってみると、ピアノが置いてあった。ギタリストだけでは、良い客を集められない、とい

う。ピアノを買う資金も、銀行が貸してくれたらしい。勿論桜木雄一郎の口添えがあつたからであらう。

だが、今、幸子は店のことに夢中になっている。余り康雄が口をはさむと、嫌われる危険性があつた。だから康雄はいいことを我慢しているのだ。それにピアノを置いたことは成功で、幸子の店はかなり繁盛している。その原因は店の雰囲気が良いことにもよるが、桜木雄一郎や原口が、女性を連れて遊びに行くからである。幸子はホステスの経験がない。だから開店しても店に呼ぶ客を持っていなかった。それなのに客が集まつたのは、何といつても桜木雄一郎や原口のおかげである。それに連れられて行った女達は、店の感じが良いので、次回は客を連れたり、友達を誘って飲みに行ったりする。バレ・ユキの店の近くには、しゃれたマンションがかなり建っており、キタ新地のホステス達が大勢住んでいた。だから店の帰りに寄る女達もかなり居たのだ。そういう点で、幸子は運にめぐまれ、開店早々、店は繁盛していた。康雄は、幸子との関係を悟られてはまずいので、まだ二度はどしか行っていないかった。今夜で三度目である。ただ開店の日、康雄は桜木雄一郎と会っていた。原口と行き、紹介されたのだ。

桜木雄一郎と会い、康雄の嫉妬や彼と幸子の関係に対する疑惑はかなり薄らいだ。幸子が、写真を見れば分る、といった通り、桜木雄一郎はどう見ても、女性に好かれるタイプではなかった。大柄で髪は薄く、如何にも好色そうな顔をして

いた。金縁の眼鏡などを掛けているが、余り似合わない。ただ誰が見ても、金を持っていることだけは何となく分る。もう五十を過ぎてゐるのに、ダイヤのネクタイピンなどをしてゐた。そんな桜木雄一郎が、三人もの女性を持つてゐるのは、金の力だった。普通の女性には好かれないが、或種の水商売の女性には狙われるかもしれない。それは金だけに最高の価値を置いている女達の一群である。彼女達にとっては、桜木雄一郎の顔は、金光りで輝いて見えるのだらう。

だが幸子は、金銭を最高の価値とは思っていないようだ。自分が望んで開いた店に対して情熱を燃やしている。それにM化学のOLだった幸子は、一流会社の幹部が持つエリートの雰囲気、男性の魅力だ、と感じているようだった。幸子が、恩を受けた桜木雄一郎を、心の底で軽蔑しているのは間違ひなかった。だから康雄が嫉いた時に、写真を見れば良い、と嗤つたのだ。もし桜木雄一郎に、男性的な魅力があったなら、それこそ康雄は嫉妬にさいなまれ、居ても立つても居られない日々を過しているに違ひなかった。

ただ桜木雄一郎は、戦前からの大地主の息子だけに、金光りをするが、余り野卑な感じはしない。原口の話では、昔、金持のどら息子達が集まるので有名だった大学を出てゐるらしい。その大学は現在かなり質が向上し、入学試験も難しくなり、堂々と出身校の名前を口にすることが出来るようになった。これは戦後、各地に大学が余りにも多く出来たためだった。それで歴史の古い伝統のある大学が見直されたから

だ。それは兎も角、康雄にとっては桜木雄一郎は、思つていたほど不安な男ではなかった。

車はバレ・ユキの優雅な明りを右側に見ながら通り過ぎた。先に車から降りた女性のマンションは、幸子のマンションよりも新しく、大きかった。

「旦那がうるさいんだらう」

と原口が貴美にいったが、貴美は笑つて答えない。ただその笑い方は原口の質問を肯定しているようだった。彼女のマンションから、バレ・ユキまで車で五分ぐらいである。客席は七分の入りである。まだこれから勝負時かもしれない。マイクを持った若い女性が陶然とした表情で歌っている。ショートカットの若いピアニストが伴奏していた。彼女は音大を出ており、アルバイトでピアノを弾いているらしい。女性が歌っているのは歌謡曲だが、ピアニストは彼女に合せて上手く弾いていた。康雄はこういう場所ですぐ歌つたことがない。会社の忘年会で時々歌わされるが、康雄の得意は民謡だった。M化学に入社した時、仕事だと思ひ、歌ぐらい覚えておいた方がよい、と先輩にいわれて、レコードを買つて民謡を覚えたのである。だから民謡なら各地の民謡を歌えるが、こういう場所で民謡を歌う気にはなれなかった。

店が広いので、客が歌つていても余り気にならない。

アルコールが少し入っているらしく、幸子は中年の二人の客と談笑してゐた。実に楽しそうである。幸子にとっては、最も充実している時間かもしれない。開店前からそうだった

が、この頃幸子の話題といえ、店の話ばかりだった。だから会っていても康雄は何となく物足りない。康雄は、桜木雄一郎が来ていないか、と店内を見廻したが、彼の姿は見えなかった。

幸子は、康雄達を見ると如何にもマダムらしく会釈したが、直ぐ席を立とうとしなかった。原口が康雄の気持を察したのか耳打ちした。

「マダムは僕の愛人ということになっているでしょう、だから直ぐ来ないんですよ」

「別に気にしてないよ」

と康雄は答えたが、内心は不愉快である。

十分ほどしてから、幸子が康雄達の席にやって来た。幸子は紺地に赤い襟のついたスーツ姿だった。赤い縫取りの大きなポケットの模様が ついて いるが、縫取りは飾りで、ポケットはない。蝶型の金のアクセサリを襟の傍につけている。

蝶の眼は小さなダイヤである。幸子は、たまには和服を着た日もあるが、余り和服を持っていないので、洋服で誤魔化している、と康雄にいつていた。

着物など着たら如何にも水商売の女という感じになる。こういう店には洋服が似合うんだよ、と康雄は自分の意見を述べたが、幸子としては、時々、和服も着てみたいらしい。

幸子が相手をしていた中年の男性は、病院の院長と事務長だ、という。康雄も名前を知っている病院だった。確か長者番付に絶えず名を出している男である。

幸子を狙っているに違いない、と康雄は思った。かつて幸子は場末で喫茶店を経営していた。遊戯店の従業員や、ちんびらのような若者達が、彼女の店に絶えず出入りしていた。現在の幸子は、そういう世界から脱出し、別な世界の男達と付合うようになって いる。俺が力になってやったのだ。それを忘れるな、と康雄はいいたかった。

貴美ともう一人のホステスは飲んだり歌ったりして楽しんで いた。この店に居ると、康雄は、何となく苛々する。幸子は俺の女だ、という自信が薄れて行くからだだった。

半時間ほどたった時、スエードのコートを着、髪を長く伸ばした女が一人で入って来た。貴美の連れはマイクで歌っていた。

「まあ、ルリちゃん」

と貴美が大声でいった。

康雄はその女を見て、はっとした。康雄の席には来ないが、何時も遠くから、康雄に会釈している女だった。

ルリと呼ばれた女は、康雄と原口に会釈すると、一寸迷った風だが康雄達の席に 来た。

「ルリちゃん、一人なの？」

と貴美が訊いた。

「ええ、帰る途中で寄ったのよ」

とルリは答えた。

「一人で？」

と貴美は不思議そうに呟いた。

こういう店に、一人で飲みに来る女性には滅多に居ないから、貴美が不思議がったのも当然である。

「ええ、私、ママとマンションが一緒なの、だから、時々来るのよ」

ルリはそういうしながら、一瞬視線を康雄に向けた。康雄は愕然とした。康雄はこの時、彼女と何処で会ったか思い出したのである。

何時だったか、康雄は幸子が留守なので、幸子のマンションの屋上に上ったことがあった。誰も居ないと思ったが、若い女が洗濯物を干していた。それがこの女だったのである。ルリは、康雄が幸子の部屋を訪れたのを知らない。だが、マンションの何処かの部屋を訪れた、と思っている筈だった。そうでなければ、男が屋上に上って来たりはしない。

貴美はルリに、康雄と原口を紹介した。

ルリは微笑しながら康雄にいった。

「本当に偶然ですわ、時々お店でお会いしていますけど、勝手に行くのは厚かましいので、失礼しています」

ルリはホステスらしいからぬ上品な言葉でいった。康雄は、君に会ったことはない、と嘘をつこうか、と一瞬考えたが、だが、そんな嘘をつけば、幸子との関係を見破られる恐れがあった。

「やあ、あの時の人でしたか、何時も店で挨拶されるので、何処で会ったのかと、気にしていたんですよ、まあ坐り給え」

「有難う御座居ます、だけど、私、今からこの店のお手伝いをしますので……」

幸子がルリを呼んだ。

「宇田さん、彼女だったんですか？」

と原口が呟いた。

「驚いたな、ここの店のママと同じマンションらしい、それなら僕もママのマンション知っているよ、僕の社の者が住んでいてね、近くまで行った時寄ったことがあるんだ、外出しているようだったので、屋上に上ってみた、その時居たのが彼女だよ、女って分らないな、素顔と化粧した時とは全然違うんだから、いや、驚いた」

康雄は額に冷や汗が滲んでいるのを感じた。原口は康雄の言葉で、ことの成行きを感じ取ったようだった。

「宇田さん、それは奇縁じゃないですか、僕も知らないけど、品の良い大人しい女ですね、香本のホステスには見えません」

「済みません、私達品が悪くて……」

貴美は一寸ふくれたようだった。貴美と原口とは間違いない関係があった。貴美がふくれるのも当然だろう。貴美の話によると、ルリは指名制のホステスではない。俗にいうヘルプで、三、四ヶ月前に入店したばかりらしい。香本のような指名制のクラブにも固定給だけのヘルプが居るのを、康雄は初めて知った。

「でも、うちの店では、ヘルプだけじゃやって行けないわ、

経営者は衣裳にうるさいし、二、三日、同じものを着ていると直ぐ文句をいうの、だから彼女も店が終ってから、アルバイトしているのね、でも何時まで続くかしら？」

貴美のようなベランホステスは、固定給だけで働いているヘルプの女性を一段下に見ていた。ルリが、こちらの方を見ながら、幸子と話をしている。屋上で会った時のことを話しているに違いなかった。

原口が腕時計を見た。

「宇田さんそろそろ出ましようか……」

貴美が、まだ良いじゃないの、折角来たのに、と文句をいったが、原口はもう席を立っていた。そういう点、原口は決断力にすぐれていた。

日曜日の昼、康雄は幸子に電話した。ルリが同じマンションに住んでいることを思うと、幸子の部屋を訪れ難い。それは幸子も同感らしかった。康雄は今更のように、株で儲けていて良かった、と思った。株で儲けたので、この頃は、外出する際に現金を十万ぐらい持っている。康雄はPホテルで待つことにした。ホテルに部屋を取り、二人で食事でもすれば五万円ぐらい飛んでしまう。交際費で落す場合は気にならなかったが、自費で払うとなると、五万円は大金だった。これは部長になっても同じことである。ただ康雄は財務部に居る限り、証券会社の法人部の連中の情報で、相場を張って儲け

ることが出来る。だから給料以外の小遣いを持てるのだ。それがないと、女性とホテルに泊ることなど到底出来なかった。

康雄はゴルフに行くといって家を出たので、ゴルフバッグを持っていく。服装もゴルフ用のスポーティーな恰好だった。

いったんホテルの部屋にゴルフバッグを置いて、康雄は外出することにした。幸子がホテルに来るのは、午後五時ぐらいになるらしい。土曜日の夜は、午前三時過ぎまで営業しているの、幸子は日曜日の昼過ぎまで寝ている。

幸子が店に出るようになってから、デートの日や時間が、これまでより窮屈になった。だが、店に対する幸子の情熱を見ると、文句はいえなかった。文句をいうと、幸子が逃げて行くような気がする。

これまでと違い、現在の康雄は、幸子の力になってやれなかった。康雄は株で儲けた二百万円を、ちびりちびり遣おうと思っていたが、和服の一枚でも買ってやり、幸子の喜ぶ顔が見たくなっていた。幸子は康雄の収入を知っている。だから康雄に金銭的な援助は求めていないが、矢張り康雄からブレゼントされるのは嬉しいだろう。

幸子に和服をブレゼントする以上、安物では駄目だ。三十万前後の和服でなければならない。幸子がやって来るまで、まだ三時間前後はあった。康雄はゴルフ用の帽子を被り、サングラスを掛けた。冬なのでサングラスなど必要ではない

が、こういう時の用心のために買ったのだ。ルリの件だけではなく世の中は狭い、まして大阪は東京より狭かった。

何時何処で誰に見られているかもしれない。また誰と会うかも分らなかった。ゴルフ帽を深めに被り、色の濃いサンダラスを掛け、部屋についている鏡を覗いてみた。

自分でもぎょっとしたほど人相が悪くなっている。というより財務部次長の顔ではなかった。康雄は何となくにやりと笑ってみた。直属の社員なら別だが、若い社員なら康雄とすれ違っても、気付かないだろう。これで口髭でも付けければ、全く別人になりそうである。

康雄は鏡に向って眉を寄せたり、顔をしかめたり、鼻の下に指を当てたりしてみた。

ホテルを出る前、もう一度幸子に電話した。なかなか幸子が出ない。昼食のために近くのレストランにでも行っているのか、と電話を切ろうとした時、幸子の眠そうな声がした。

「何だ、まだ眠っていたのか、もう二時過ぎだぜ」

康雄の声は自然にとげとげしくなっていた。

「御免なさい、起きる積りだったのに、また眠ってしまったわ、身体がだるくてしょうがないのよ、こんなことじゃ駄目ね」

と、幸子はいって欠伸をした。

「当り前だよ、今から起きるなら、五時には来れないだろう？」

「そうね、六時にしてくれない？ 六時なら間違いなく行け

るわ、ルリのために、めんど臭いことになったわね」
「世の中は狭いんだ、じゃ僕は今から五時半まで外出する、五時半には戻っているからね」
と康雄は念を押した。